****

**「Panda杯全日本青年作文コンクール2017」**

**入 賞 作 品**



**公益財団法人日本科学協会**

**業務部 国際交流チーム**

**目　次**

**【優秀賞】**

小嶋 心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

山本 陽子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

鈴木 あかね・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

新保 清美・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

岩瀬 正美・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

藤原 佳代子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

中原 隆雅・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

面出 望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

田中 歩佳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

山本 晟太・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

【入　選】

加藤 亜衣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

林 貢平・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

明瀬 良治・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

野村 由稀乃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

新斗米 創・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

**【優秀賞】**

**小嶋 心**

**忘れられない歌**

蝉の歌。初めて聞いた時、あまりに純度の高い歌声にしばらく身動きできなかった。

テレビのモニターには中国貴州省千里村の古い町並みや天高く聳え立つ鼓楼が映し出されている。それはまさにアジアの原風景の如く、息を飲む美しさだった。そしてスピーカーから私の耳に伝わるそこに暮らすトン族の大合唱。壮麗な楽器による伴奏があるわけでも、音響設備の整ったホールで歌っているわけでもない、だが、幾重にも重なる歌声は何か特別な響きをもって感じられた。彼らを取り上げたあるテレビ番組は私の視覚聴覚をこれまでになく刺激して心を掴み離さなかった。

トン族の歌声の余韻がまだ微かに耳に残るなか、私はあの合唱は何を歌ったものなのか、さらには実際にその場に行って聞いてみたいと思い、「千里村トン族」とインターネットで検索をかけてみた。すると、ある事実に突き当たった。それは、トン族は文字を持たないということだった。当初、これが何を意味するのか全く見当がつかなかった。文字は我々人間の最も根本的な生活基盤の1つであり、そもそも漢字は中国産のものではないかと疑問が頭の中を駆け巡った。漢字の発祥の地で文字を使わない民族がいることは矛盾したことのように感じられた。

しかし、文字を持たないことは中国に限ったことではなく、日本も同様な例があると知ることになった。先日大学の講義で偶然にもトン族について取り上げられたことがあった。そこで教授が引き合いに出したのは、日本の昔話だった。トン族の蝉の歌は、歌で村の歴史や文化を伝えているという。日本でもある地域に伝わる民話や伝承を書物の形式ではなく口伝えによって今に残している。中国の1 / 2 5の国土面積の日本でさえ文字以外の伝達形式がある中で、まして中国では歌のような文字以外の伝達手段があるのも当然のことのように思えてきた。さらに教授はこう続けた。

「人から人へ物事が伝わるとき、そこには人の思いが介在している。」

蝉の歌を聞いた時、実際歌詞があるのかさえ分からないメロディーだった。だが、合唱が始 まったその刹那、心奥底に語りかけていくような、背筋がぞくっとするような体験をした。心と心が通じ合えた感覚だった。おそらく古から受け継がれた村の歴史や文化に付随する卜ン族の思いの部分を、たとえ彼らについて無知であっても受け取ることができたのであろう。

私は今年の春から大学に進学し書道を専攻している。研究対象となるのは、いうまでもなく文字である。文字の造形美を日々模索する中で、中国古代甲骨文字から、明代清代の書に至るまで、中国書に関わることは頗る多い。中国では同時代でありながらチベット自治区と北京では字の書きぶりが全く異なるなど中国書道は他の様々な書の分野の中でも比類なく面白いと思う。文字研究をする立場の私にとって、これまで文字は今も昔も最もシンブルで正確なコミュニケーションツールで文明の発展を担ってきたと考えてきた。況や中国ではなおさらだと信じて疑わなかった。だから、中国における文字文化は普遍的なものではなかったと考えさせられたことは私の中でイデオロギーを覆す大きな事件だったといえる。改めて多様性に目を向けなければならないと思った。広大な中国は、語り尽きることのない様々 な慣習、そして民族が紡ぐ多くの文化が点在するヴァラエティに溢れた国家だからだ。

トン族は650年前明の戦乱から逃れて千里村に住むようになったそうだ。当時、既に文字は十分に確立され、現在同様当たり前のように使われていたろう。でも、トン族は文字で記すことを選ばすに、伝達手段を歌に託した。今でもトン族の大人がまだ幼い子供達に蝉の歌を教えている日常風景は、歌はまるで文字を超越した伝達能力を秘めているかのようである。

昨今、SNSを先駆けとして文字のみによるコミュニケーションはますます発展の一途に思われる。人と対面する時間が日に日に失われ、スマホやパソコンに取って代わられるような恐怖心さえ感じる。

書は私なりに文字をただ書くのではなく心を込めるからそこに美が立ち現れてくるのだと思う。普段ごくありふれた文字にどれだけ印象付けをできるかが私の日々鍛錬するところである。コンピュータが普及した今日、書はアナログだと言われ、上達する意義を疑問視する声もある。しかしながら、心をこめた字は、ワープロの活字には表現できない、文字のその字義だけでなく、字義以外の思いを伝達することができる。それは、まさにトン族の蝉の歌がその歌の内容だけでなく、私が彼らの歌に付随するハートを汲み取れたのと同義のように思われる。書もトン族の蝉の歌も時代を超えて繰り返されることで現在も日々洗練されゆく。

現在インターネット上に飛び交う活字は瞬時にして情報を交換できる利点から、多くのひとが手先のスマホの情報に目を食い入りがちであるように思う。だがそこに人の心は見えてこない。スマホの文字の羅列に心を動かされた経験は振り返ってやはりない。なんだか、とても寂しい気持ちになった。

トン族の蝉の歌は、この世界の断片としての多様性とともに世界共通の社会を包含する人と人との思いについて教えてくれた。思いを伝えるという行為は、あらゆる国や地域でその手段は違えど、世界中で時代を超えて変わらずに行われてきた。しかしながら今、その人と人との思いの伝え方が徐々に消え去ろうとしてる。今を生きる私たちがトン族に学ぶことはとても多い。

私たちが大量の言語情報に包まれてせわしなく誰かとやりとりしている今も、千里村では美しい歌声が響いているのかもしれない。

今一度悠久の中国に思いを馳せ、トン族の歌声に耳を澄ませたい。

**山本 陽子**

**良きライバル**

「この子は英語が全く話せないから中国人ではないわ！」アトランタの空港で中国人女性はわたしをちらりと見た後、空港スタッフにきっぱりとそう答えた。わたしはその時抱いた感情を鮮明に覚えている。「ああ・・・やっぱりそうだ。中国人はわたしが思っていた通りの人だ」と。

　高校二年の夏、わたしは初めて日本を出た。それもたった一人で。ボランティア活動をするためにコスタリカ共和国を目指していた。出国する時のわたしは、まさかこの後ハプニングだらけの大冒険が待っているとは思ってもみなかった。すべての始まりはわたしの出国にまるで合わせたかのような台風の直撃であった。その台風のせいで予定していた飛行機は遅れ、乗り換えは急遽三回になり、空港で二日夜を明かした。日本語すら耳にしない知らない土地で、誰も頼ることが出来ない状況に置かれたわたしは身も心もすっかり疲れ切っていた。そんな時またもやトラブルが発生したのだった。飛行機で送られて来ているはずの荷物が空港に届いていないのだ。とても焦って困っている時にこの中国人の女性が話しかけてくれた。彼女が空港スタッフに事情を説明してくれていた時に空港スタッフはその女性に「この子も中国人ですか？」と問いかけた。それに対する答えとして、文頭の言葉が出たのだ。‘英語が話せないから中国人じゃない‘といった内容の言葉は、ご指摘の通り英語が苦手なわたしでも、さすがに内容くらいは理解できた。しかし、わたしが本当に衝撃を受けるのはこの後に続く彼女の言葉であった。それは「確かにこの子は中国人ではない。日本人よ。でも今はそんなの関係ない。わたしはこの困っている少女を助けてあげたいの。」確かにそう言ったのだ。この瞬間私の中の何か大きなものがぐるぐると回って、色々な感情が湧き出てきた。想像もしていなかった言葉に対する驚き、女性への感謝の気持ち、自分を恥じる気持ち、そして素直にこの女性が素敵だなと思った。

　恥ずかしながら、私はそれまで中国についてあまり良いイメージを持っていなかった。領土問題や戦争など暗い過去のことばかり耳にしていたため、勝手に中国人は日本人を嫌っている、中国人は怖い、と思っていた。本当は知ろうともしていなかっただけなのに。わたしはこの中国人女性に出会い、自分の考えがとてもちっぽけだと痛感した。そして、中国人を見る目が変わった。そのおかげでコスタリカでのボランティア中は一緒に活動した中国人の良いところをたくさん見つけることができた。例えば、中国の多くの学生が英語を堪能に話せるのは日本の教育としては本当に見習うべき点であると感じた。そして、逆に中国の子は「日本人はとても器用だ」とわたしが作った折り紙をたくさん褒めてくれた。中国人も日本人もそれぞれに強みがあり得意とする分野がある。わたしは、日本と中国が過去のことで争うばかりでなく、お互いの長所を認め合い、そして良きライバルとして切磋琢磨することができる関係になれたら良いなと思うようになった。少なくともわたしは、空港で言われた「日本人は英語を話せない」という言葉がとても悔しくて、今必死に英語を勉強している。しかし、けっしてそこに憎しみはない。そこにあるのは良きライバルを見返したいその一心である。

　中国人女性と出会った、その空港では最終的に荷物も無事手元に届いた。しかし、お礼を言おうと思った時には、もう彼女の姿は見えなくなっていた。

大学生になった今、わたしはずっと記憶の中に留まっていたこの体験を文章にすることを決めた。そして一人でも多くの日本人の中国に対する悪いイメージを変えたいと思うようになった。もちろんわたし一人の体験談で大きな変化を起こすことが出来るという自信はない。でも、わたしは伝えたい。なぜならそれがわたしを助け、そしてわたしを変えてくれたあの中国人女性にできる唯一のお礼であると思うから。

**鈴木 あかね**

**あの村から継ぐ「平和のバトン」**

　つい最近、一通の手紙が届いた。それは高校の先生からで、あの村の話が本に載ったという。最後に「大好きな村のことを周りの人にも教えてあげてね」とあった。とてもうれしかった。なんだか口角も緩んで「そうそう」と思わず手紙に返事をしてしまいそうになる。私の中にある大切な場所、人たちを思い出した。

　中国には、高校生の時に授業で二度訪れた。最初に中国に行くと決まったときは正直に言うと、かなり不安だった。文化的な違いからくるものもあると今は思うが、当時は本やテレビ、人の噂など、誰かが中国の一面を切り取った、つくった情報しか知らなかった。そしてそれらが言葉にならない私の偏見を生んでいた。

　実際に中国を体感し、異文化理解へと考え方・捉え方が大きく変わった。むしろ、今は中国に行きたくて仕方ない。きっと今なら「明日中国に行かない？」と言われても二つ返事で「行く！」と言えるだろう。こんな風に変わったのは村で出会った大切な人たちがいたからだ。

　私たちは万里の長城近くの興隆にある村を訪れた。滞在した日数を数えれば片手に収まるほどだが、ここでの学びは今もそしてこれからも私の宝物だ。

この村は戦時中、旧日本軍によって大虐殺が行われ、村の誰もがその歴史を知っている。村には小さな博物館があり、ほんの数枚の写真と展示物がある。けれどもその印象は今も私の頭から離れない。いくつかの写真の中に若い日本兵が写っていた。彼は笑顔でこちらを向いて立ち、その手には人の頭をぶら下げていた。自分が凍り付いていくのを感じた。とても辛く悲しかった。戦争の本当の恐ろしさはここにあると感じた。戦争は同じ人間、同じ日本人をこれほどまで苛酷に変えてしまうのか。

　当時子どもだった、村のおじいちゃんたちにお話を伺った。山に隠れ生き延びた方、銃撃される中生き延びた方、震えながら話をしてくれる方もいた。中国語を話す彼らの言葉を直接理解はできない。でも痛いほどその恐怖、悲しみが伝わってくるのだ。

　それなのに中国で出会ったすべての方が本当によくしてくださった。ホームステイをさせてもらったり、村の人たちと一緒にダンスをしたり、たくさんの思い出がある。「おいしい」「ありがとう」と数少ない言葉しか出てこなかったが、それでも一緒に過ごすだけで楽しかった。

　一人のおじいちゃんが最後に「またおいで」「友だちになろうよ」と言ってくれた。彼にとってそれは、どれほど勇気のいる言葉だっただろうか。本当に、本当にうれしかった。同時に、彼らから「平和のバトン」をもらったのだと強く感じている。きっと日本人の私におじいちゃんたちは、国や人種を超えて共に平和をつくるための話をしてくれたのだろう。戦争はもう二度と起こしてはいけない。そのことをまっすぐに教えてもらった。だからこそ次は私の番なのだ。

昔、この村で日本人は大虐殺を起こした。それは消えることのない、決して忘れてはいけない歴史だ。そんな歴史を持つ村の方々が本当に温かく私たちを受け入れてくれたことを、私はこの先も忘れない。

　日本で聞く中国のイメージは決していいものばかりではない。何も知らないとき、人は恐怖心や偏見を抱いてしまう。でも今の私は、ほんの少しだが自分自身が感じてきた中国を知っている。あの国・あの人などに関係なくみな良い点も悪い点もある。自分の知っている世界に合わせてばかり見ていたら、憎しみや恐怖ばかり生まれ、本当に大切なことを見失ってしまうだろう。そう強く感じた。

今、中国に会いたい人、訪れたい村がある。そして受け継いだ「平和のバトン」がある。あのおじいちゃんたちのように、次は私がこのバトンを国や人種の壁を超え繋いでいく。

　大好きなあの村から受け継いだ「平和のバトン」をつなぐために私ができること、それはこの体験を綴り、伝えることなのだと思う。そして、またいつの日かきっと中国にいる大切な友だちに会いに行こう。

**新保 清美**

**となりの姐姐**

私が姐姐と会ったのは、アメリカでの留学中であった。私は学部のプログラムで約一年間の留学に行くことになった。様々な価値観を学びたいと、アメリカを選択した。初めての海外長期滞在であった。行先である大学では、寮生活であった。2人部屋で暮らすことになった。私が先に寮についたらしく、相部屋らしき人は誰もいなかった。どんな子が来るのだろうかとワクワクしていた半面、仲良くできるか不安であった。何日か過ぎても来なかった。いよいよ学期が始まるという頃になって、私が寝ていた時にガチャとドアを開け誰かが入ってくる音がした。私はとっさに起き上がり、その子を見た。その子は、私を起こしてしまったと思ったのかsorryと謝った。私は寝ぼけたまま自己紹介をした。彼女は私より5歳年上で、中国から来た元気な子であった。博士号を取得しようとしている彼女は、学校が始まってから、机に向かい必死に勉強していた。中国人は、声が大きくて、ものを散らかすというイメージを持っている日本人は少なくはないであろう。しかし、彼女は優しい口調で話し、とてもきれい好きであった。イメージとは真逆であった。彼女はとても思いやりがある子であった。ある日、私が授業から帰るとギターをもった姐姐がいた。ギターを趣味にしようと買ったのだという。それからというもの毎日毎日勉強の合間を縫いながら、ギターの練習をしていた。中国の曲を何曲か練習していた。実は彼女のお母さんといとこの誕生日が間近で、彼女たちに完成した曲を聞かせたいのだという。そのとき私は、なんて思いやりのある子なのであろうと思った。親戚だけでなく、私のことも気にかけてくれた。勉強について悩んでいるときに、様々なアドバイスをしてくれたり、教科書や単語帳を貸してくれたりした。私が暇そうにしているときは話しかけてくれた。恋愛の話から自分の家族の話、中国での生活や、日本と中国の関係まで、いろいろなことを話した。私は、日本と中国の関係を話すことが怖かった。なぜなら、歴史的に日本のことをよく思っていない中国人が多いと聞いていたからだ。しかし、姐姐は前向きに話してくれた。日本と中国の問題をどちらも受け入れ、将来友好を強くしていきたいと言っていた。私は、姐姐のことを深く知り、彼女の気持ちを知っていくうちに疑問が浮かんだ。なぜ、一人一人の友情は深いものにできるのに、国と国とではそうはいかなくなるのであろうか。日本と中国でも、深い友好を築くことはできないのであろうか。隣国と友好を築けずに世界平和など実現できるのであろうか。私は、どんどん日中関係への興味が深まっていった。

日本に帰ってきてからは、大学の中国研究会に入部した。中国研究会では、主に中国の文化や歴史を学び知識を深めていった。中国人留学生との交流を通し、日中の友好は実現できると確信した。中国研究会では、知識を蓄えるだけでなく、発信していくイベントの主催も行った。日中関係に興味のない人、無知な人にも興味をもってもらえるよう発信してきた。人間は、一人一人を国単位でとらえてはいけないと思う。例えば、日本人は中国人を中国という国の印象でとらえてしまう。確かに、個人のアイデンティティとして母国を持つことは大切である。しかし、個人個人を全く別な存在として見なければいけない。中国人でも清潔な人はたくさんいる、静かな人もたくさんいる。逆に、日本人は清潔、時間に厳しいという印象をもたれるが、整理整頓ができない人もいれば、時間にルーズな人もいる。中国人、日本人としてひとくくりにするのではなく、個人としてみる必要がある。いつしか個人個人のつながりが、国のつながりに変わること私は信じている。隣の姐姐と深い友情を築けたからこそ、日本の隣の国である中国と深い友好を築けると信じている。

**岩瀬 正美**

**「私は何人なのだろう。」**

思春期のころから、成人を迎えた現在に至るまで、この問いはずっと私の胸の中に残り続けている。私はいったい何人なのだろうか。

私の母は中国東北地区の生まれで、母が今の私と同じ歳に、母の故郷に旅行に来ていた日本人である父と知り合い、結婚のために日本に渡ってきた。その数年後に私は生まれ、日本で両親に育てられた。日本人が多く通うごく一般的な保育園にいたが、卒園を迎えた際に先生の勧めで小中学校は中華学校に通うこととなった。当時の私は中国語が話せなかったため、中華学校で不慣れな言語で勉強することにひどく緊張していた。いざ入学し、同じクラスの生徒を見ると、中国人である生徒や私と同じハーフである生徒、両親ともに日本人である生徒と、家庭や文化に違いのある生徒が多く、毎日クラスでは中国語と日本語が飛び交うような環境であった。はじめは緊張していた私も、片言ながらも中国語を話し、ともに勉強や日中文化の違いを教えあうような友人を作ることができた。気づけば私は中国語と日本語を織り交ぜた話し方をするようになり、中国と日本の文化両方が私の日常を築いていた。

中学に上がったころから日本の公立中学生との交流会が行われるようになり、ある日同じグループになった女子生徒に「あなたは何人なの。」と質問された。私は言葉に詰まってしまい、彼女に返答することができなかった。これまで私は自分が「何人」であるのかを考えたことがなかったからだ。彼女の質問に答えられなかった私は大きなショックを受け、家に帰って家族に同じ質問をした。母は日本国籍であるが、生まれも育ちも中国であるから自分は中国人であると答えた。弟も同じ理由で、自分は日本人だと答えた。しかし、私はどちらかに言い切ることにどうしても違和感を覚えたので答えが見つからずに、その日から自分が何人であるのかを考えるようになった。

　中学を卒業し、私は県内の公立高校に入学した。これまでの学校生活から一変し、中国語を耳にする機会はなくなり、私は新しくできた友人たちには自分が日中のハーフであることを伝えることがなんとなくできなかった。

　そのまま半年が過ぎたころ、中国にある姉妹校から交換留学生が私の高校にやってきた。彼女は少しの英語と日本語を話せてはいたが、担任との意思疎通が十分に行えなかったことが何度かあった。二人のやり取りを見ていた私はもどかしさを感じ、「あまり上手ではないけれど良かったら通訳しようか。」と中国語で彼女に声をかけた。二人は驚いた顔をしていたが、私に通訳を任せてくれた。必要事項の伝達を終えた後、二人は私に感謝を告げてくれた。このとき初めて私は中国語を勉強していて良かったと感じることができた。これまでの経験のおかげで人の役にたつことができたと実感することができたからだ。

　これ以来、私は友人らに自身がハーフであることを告げ、友人らとともにその交換留学生と一緒にすごす時間が増え、再び中国語や中国の文化に触れる機会が増えた。「自分が何人であるのか」についても再び考える機会が増えた。また、彼女との出会いを契機に私はテーマパークでのアルバイトも始め、中国語を使う機会を自ら増やしていった。次第に私は中国語を話せることに誇りを感じていた。

　大学生になった今も、私は自分が何人であるかはわからずにいる。しかし、これまでの経験から、少なくとも自身は「日本と中国の両方の良いところ」を持つ人間だと考えており、何もどちらかに限定した答えを導き出そうとしなくても良いのではないかと考えている。互いの良いところを自身が発信していきたいため、将来は「日本と中国とをつなぐ架け橋のような人」になりたいと私は思う。

**藤原 佳代子**

**わたしは中国で生き返る**

久しぶりに、昔好きでよく聴いていた中国語の音楽を、10年ぶりくらいに聴いてみた。なぜだかわからないけど、心がふるえる。涙が出てくる。あぁ、やっぱり私は中国語が好きだ。中国が好きだ。また行きたい。その思いをずっとしまいこんで忘れていたんだ。思い出すきっかけは、1年前のある出来事。

思いもよらなかった天災がわが身にふりかかった。熊本地震だ。実家は住めなくなったものの、幸い、さほど被害は受けず、わたしにはまったくマイナスの影響を与えなかった。むしろ、子育てのほうがきつくて疲れて、ノイローゼになりかけていた。地震で揺れている最中、また避難しているとき、そして落ち着いてからも、自分自身に問われた気がした。

「このまま後悔なく死ねるの？」

「ううん、もっとパワフルに生きてみたい。」

これまでの生き方、これからしていきたい生き方を考えるようになった。自分のしたいことをあきらめて、苦手な子育てや家事に勤しみ、そつなく普通に生きていくのか。どこか心の奥から、ほかにしたいことがあると言っている。いったいそれは何だろう？　あれ？　わたしは何が好きだったんだっけ？　母のような良い妻、良いママをめざして頑張っているうちに、すっかり自分のことがわからなくなっていた。体調を崩し、家事ができなくなった。

それで、ふと、昔、録音したままだった音楽を聴いてみた。涙とともに思い出がよみがえってくる。

社会人になるまえ、3週間、上海でプチ留学をしたことがある。実家の親が厳しかったこともあり、親元を離れてはじめて自由を感じた。

日本では、外国人が好きで私はよく話しかけたくなるのだけど、ここ上海ではわたしが外国人。中国語は勉強してはいるけど、まったく聞き取れないし通じない。なんだか中国人のひとは声が大きくて、笑ってくれないし怒っているのかな？　不安と寂しさを感じていたけれど、徐々にわかってきた。中国人は、日本人とちがって無駄な愛想はふりまかないだけで、心はとっても優しい。道をたずねたら、自分のことのように親切にくわしく教えてくれるし、銀行だったか言葉が通じなくて私が困っていると警備員さんが助けてくれた。よく通ったカフェの店員さんとは仲良くなって、いろんな話をした。初めてナンパもされたことも良い思い出（笑）。

そして一番感動したのが、宿泊していたホテルのレストランの従業員さん。毎朝、「ごちそうさま」「ありがとう」「美味しかったよ」って私は挨拶するのだけど、ニコリともせず返事もない女の子がいた。最後の朝、「今日が最後。日本に帰ります。ありがとう」って言ってもいつものようにスルー。でも、部屋にもどって荷造りしているとき、ノックされたのでドアを開けてみると、ウエイトレスの女の子が！　お土産にハンカチをくれたのです！

この女の子をはじめとする、中国で出会ったひとたちのおかげで、私は中国が大好きになった。

帰りたくない！　もっといたい！って思ったけど、会社の入社式には絶対出なければならず、泣く泣く帰国。それから仕事で余裕がなく、毎日必死で、ほどなく支えであった彼氏との子ができて結婚して退職。育児に専念して、子どもからたくさんの幸せを教わった。二人目の子どももできて、あっという間に月日が過ぎていった。

目の前の小さい幸せに満足してきた。でも、まだ自分のやりたいこと、やりきった！とは言えない。夫や親は、「子どもが大きくなるまでの我慢」だと言う。我慢して自分を殺して生きて、本当の幸せといえるのだろうか。

地震はわたしに大事なことを教えてくれた。

上海で買った本で捨てきれなかった本がある。中国人が書いた中国全土を旅したエッセイだ。中国はとても広くて、まったく違う文化を持つところも面白い。わたしも中国全土を旅してみたい！そう思うと、生きていくエネルギーが沸いてくる。

わたしは中国で生き返る。

**中原 隆雅**

**私と中国　2017**

「メイヨウ（没有）」。これは、私のような 捜査官であれば、おそらく誰でも知っている中国語である。残念ながら、一般的に、我々捜査官の間における中国人のイメージは余りよろしくない。日本人に比べて、中国人はなかなか罪を認めない。例えば、万引きの事件。 防犯カメラにとある中国人男性による犯行の場面がバッチリ映っている。我々は、 彼に対して、防犯カメラの映像をみせた上で、 「君が盗んだんだろう」と聞く。どうみても彼だ。普通なら認めるだろう。しかし、そこで彼から返ってくるのが冒頭の言葉である。いわゆる否認だ。被疑者が罪を否認すると、捜査やその後の裁判での手間が圧倒的に増える。 中国人被疑者の取調べを何回か繰り返すうち、捜査官は、自然と「メイヨウ」という言葉を覚え、中国人に対して余りよろしくないイメージを抱くようになる。

私は、数年前、勤務先から派遣されて２年間ほど米国の大学院に留学し、そこで数多くの中国人と知り合うことになるのだが、冒頭に挙げた「メイヨウ」は、 「ニーハオ （你好）」「シエシエ（谢谢）」を除くと、留学前の時点で私が知っていたほとんど唯一の中国語であった。私は、中国及び中国人に対して、ほとんど興味もなく、また、取調べの場における「メイヨウ」 の マイナスイメージをもった状態で渡米したのだ。大学院が始まると、約６０名の留学生の半数程度 が中国からの留学生である。日本人は私を含めて４人。数で圧倒的に負けている。渡米の少し前、中国の反日デモの映像を観たような気もするし、先輩から聞いた中国人による凶悪事件の話も頭をよぎる。これはマズい。ところが、 いざ話してみると、皆とても感じがよい。反日感情など全く感じないし、当たり前だが、日本で観てきた被疑者達とはぜんぜん違う。同じアジアということで親近感もあり、あっという間に仲良くなった。私の中国人に対する漠然とした不安感もすぐに消えていった。

留学先は米国であったが、印象に残っている思い出は中国人の友人とのものが多い。彼／彼女たちは、若干押しが強いところもあるが本当に親切で情に厚い。あるとき、私が、学校の食堂にて家から持参したサラダを食べていると、それを見た中国人女性のクラスメートが、「まぁ、サラダだけ？あなたの奥さんは料理が苦手なのね。かわいそうに。」と言う。当時、私はダイエットをしており、別に妻がサラダしか作れないわけではなかったのだが、ついつい言葉を濁してしまった。すると、その数日後のお昼休み、その子が私の元にやってきて、自分の弁当からおかずをおすそ分けしてくれたのだ。料理の味は、正直まずまずといったところであったし、彼女の真意は分からなかったが、「中国の女の子は積極的だなぁ」、「独身だったらよかったなぁ」などと思ったものである。また、あるとき、私が当時使っていたスマホの液晶画面にヒビが入っているのを見た 中国人の友人が、「自分の知り合い（中国人） なら直せる」と言ってきた。私は、下手に触ると完全に壊れてしまうのではと心配し、遠回しに断ったのだが、その友人は、「もう彼と約束してある」と言う。押しに負けて その知り合いに修理をお願いしたのだが、彼は一度目の修理に見事に失敗した。私は、彼の努力を讃え、修理に出すからいいよと伝えた。しかし、彼は引かなかった。彼は「絶対に直す」と言って、彼の２台のスマホうちの１台を、「替わりに使ってくれ」と言って私に手渡し、私のスマホを持ち帰った。その後、彼は見事に修理に成功し、せめて使用した部品代を支払いたいという私の申出を頑として受け付けなかった。初めて会った私のためにそこまでしてくれたことに驚いた。この彼とは今でも連絡を取り合っており、この７月に中国で行われる彼の結婚式に出席させてもらうことになっている。

こうした経験を経て、私の中国人に対するイメージは、「メイヨウ」から「ポンヨウ」に変わったのである。

**面出 望**

**孤独に直面して**

　漢詩に出会ったその日から、私は中国に不思議と親近感を抱いていた。中学の国語の授業で、先生が中国語で孟浩然の「春暁」を音読してくれた。「春眠不觉晓 处处闻啼鸟……」こんなにも美しく、力強い言語を聞いたのは初めてで、すぐに中国語の虜になった。そして、いつか中国に行きたい、孟浩然のような中国語の達人になりたいと思った。

　夢を叶えるため、私は中国語専攻に進学し、今年の3月、私はついに上海に2週間留学する機会を得た。放課後は友人たちとよく上海を観光した。見るもの聞くものすべてが中国語の世界は、私にとってとても新鮮だった。

　しかし、私は段々と違和感を覚えるようになった。ある日、友人が「中国人って親切だよね。レストランでとても心のこもった歓迎をしてくれたし、聞き取れない時は英語で説明してくれたよ」と言った。何日か経つと、多くのクラスメートが同じような経験をしていた。私は不思議で仕方なかった。なぜならどこへ行っても、中国人は大抵私に冷たいからだ。彼らは私の中国語を少し聞き取れなかっただけでイライラするし、冷たい目で私を見さえもする。これは私を苦しめた。私はこの苦しみを誰にも話したことがなく、私も日本人なのに、なぜ中国人は私に冷たいのかずっとわからなかった。ある日宿泊していた迎賓館のシャワーが壊れた時になって、私は思いがけずその理由に気づいた。

　その日、私はフロントに電話をかけ、中国語で状況を説明した。受付係が応対してくれた時、早口だったので聞き取れず、もう一度話してもらった。だが、それでも聞き取れなかった。彼女は私が外国人だと気づいたのだろう。たどたどしい英語で、ボイラーが壊れ、修理中だから待ってほしいと説明してくれた。この時やっとわかった。私の中国語は発音が比較的良い方だったので、上海の人は私の中国語を聞いて、すぐに私のことを中国人だと思ったのだ。だから私の発音が違ったり少し聞き取れなかったりしただけで、彼らは苛立ったのだ。だが私は中国人ではないため、中国語のレベルもたかが知れているし、英語すらそこまで話せない。相手の態度に少し焦りが見えると、自分はすぐに孤独を感じ、どうしていいかわからなくなってしまうのだ。

　私は同済大学の日本語学科の学生と交流したことを思い出した。私と比べて、中国の学生は日本の政治情勢により詳しいようであり、多くの日本のアイドルや漫画を知っていた。彼らは皆日本が大好きで、目を輝かせながら話す様子は、初めて「春暁」を聞いた時の私のように純粋だった。私は中国が好きだ、だから自分の中国語で日本と中国をつなぐ架け橋を作れないかと思った。

　現在、多くの中国人が日本に旅行に来ているし、仕事や勉強しに来ている人も少なくない。中には日本語のレベルが低く自分のことをうまく表現できないために、成す術がないと感じている人もいる。日本にいる外国人は日本語を話す。これが日本人の希望であり、日本にいる中国人と中国語で話そうとする人は少ない。どこにいようと、外国語で自分のことを話せない時はやるせなさと孤独を感じる。全く同じだ。私は上海にいた時このような孤独を体験したことがあるが、日本にいる中国人も同じように感じているのではないだろうか。

　これは上海への留学で得た、誰かを助けることの大切さを深く理解することができた貴重な経験である。私は自分の中国語能力を使って中国人を助けたい、彼らが孤独感から抜け出す手伝いをしたい。そのために、さらに中国語の勉強に励み、中国のことを理解していきたいと思っている。

**田中 歩佳**

**見えなかった透明の壁**

「外国人の親戚とか、おらんかな～」

高校二年生。外国に憧れを持っていた私は、家族と祖父母との食事中に呟いた。

　「俺は、満州出身だぞ～」

祖父が言った。父は、「純血の日本人だけどな。」と笑っていた。しかし、私には小さな衝撃であった。満州といえば、歴史の授業で聞いたことがあった。昔の中国の一部地域を指す言葉だ。それ以上に日中間の歴史学習において重要な内容を秘めている地域だ。だが、当時の私の心に「満州」という言葉は、日中の歴史関係を通り越し、全く違う何かが響いていた。メディアによる「映像と音で形成された中国」のイメージが、「身近に、感覚的に感じる中国」に変化していくような気がした。

　それからの私は、SNSを通して知ったC-POPに夢中になったり、中国から好きな芸能人の自伝本を輸入したりした。大学に入学し、自伝本を自力で読むために、中国語を学んだ。ただそれだけの、好きなことに夢中になっている学生だった。

　ある日、中国人の先生が「中国百科検定を受けてみませんか？」と声をかけてくださった。その検定は、中国の地理・政治・経済・歴史・文化など様々な事柄を扱う試験である。私は、「まだうちの大学から合格者が出ていません。」という言葉をきっかけに、「一番乗りで合格したらかっこいいな～」なんてことを考えながら受験を決めた。

　中国百科検定は、試験前に自由参加の検定対策講座が行われる。慶応大学の教授が、講座を開かれると聞いた私は、「滅多に受けられないから」、と講座を受けに行った。講座会場につくと、学生は私一人だった。そして、中年のサラリーマンの方が一人、それ以外は全員お年寄りの方々だった。対策講座が終わると、お年寄りの方々が集まり、日本へ強制連行された中国人の慰霊碑の話をしておられた。「まだ、知られていない慰霊碑がある。これを何とかして伝えなければ。」という話をしていた。私は、その話を耳にしながら、自分は何も知らないということを痛感した。そして、自分のような若者が多くいることを感じていた。その時、一人のおばあさんが、私に話しかけてくださった。「私はね、南京で81歳を迎えたのよ。」と幸せそうに言っていた。彼女は、南京の大学に留学していたそうだ。私は、驚きと同時に、疑問が沸いた。なぜ、そこまで中国に関心を持てるのか、一体何がそうさせているのか。

それから数日後、おばあさんから一冊の本が届いた。そこには、幼少期の満州での生活、帰国、就職、結婚、留学など彼女の人生の記録が記されていた。私は、その本を読みながら、私たち若い世代と、彼女たちの世代では、中国という国との距離感に大きな差があると感じた。戦争などで、国と国、人と人が無意識に交じりあっていた、という時代背景もあるがそれだけではない。

グローバル化が進む現代は、情報入手の手軽さゆえ、様々な国と距離が近づいたかのように錯覚してしまう。しかし、実際はそうではない。私が聞いた慰霊碑の話は、知らなければメディアでは見つからない。おばあさんの本がなければ、満州での日本人の生活を知ることはなかったし、知ろうともしなかったであろう。意識やきっかけがなければ、本当の真実は何も見えてこないのだ。それはつまり、「透明（メディア）の壁」がたっているにすぎない。向こうが見えているかのように見えて、手を伸ばせば壁があって触れることが出来なくなっている。意識しなければ、壁の存在にすら気付かない。

私は、この経験から、中国への留学を決めた。「透明の壁」を超えるため、空を飛んで触れに行こうと思った。そのとき私が何に触れ、何を感じるかは、まだわからない。しかし、きっと日本にいる今とは違う、何かを感じられると確信している。

そして、おばあさん達が私に教えてくださったように、私も誰かに「透明な壁」の存在を教えていきたい。

「あなたには、透明の壁が見えていますか？」

**山本 晟太**

**町へ出よう、村へ行こう　～多様性の国　中国～**

私と中国の出会いは人に語れるようなものではない。日中友好を考えていたわけでも、中国の持つ悠久の歴史に心動かされたわけでもない。ただ、大学入試の前期試験に落ち、後期試験として中国語専攻を選んだだけだった。私が入学した2013年4月には、小さな島を巡って日中両国の関係が近年で最悪となっていた。周りの知人にもよく「なんで中国語を選んだの？」と問われた。私は「これから先伸びそうな国の言語だから」という当たり障りのない答えしかできなかった。そんな私の思いとは裏腹に、私の中国語はみるみる上達し、北京大学への交換留学のチケットを手に入れることができた。

　入学後私は短期で上海、北京、雲南を訪れた。その経験により、私は短期の滞在では見えてこない中国の良さを理解したいと思いを強め、2015年9月から私は一年間北京大学に留学することを決意した。一年間の留学を通して、私の中国への印象は大きく変わった。私は中国の高いGDPにも関らず、心のどこかで中国は経済的に貧しい国と言う偏見があった。しかし、実際のところ、それは大きく間違っており、日本よりも先進的な部分が多々あった。ひとつ例を上げるとすると、Alipayである。これは全ての決済を携帯電話で行うことができるアプリである。決済は身分証と紐づけられているので不払いのリスクも低い。Alipayのおかげで私は中国留学中、キャッシュレスな生活をすることができた。他にも私が留学していた際はUberが中国に進出していた。Uberさえあれば、値段も高く、サービスも劣るタクシーは必要なかった。さらには、OfOというシェアサイクルのサービスまでも存在していた。規制の厳しい日本ではこれらのサービスは一部の地域でしかリリースされていない。我々日本人が中国に学ばなければならない時代が再び来たことを実感した。

　しかし、中国は広い。中国で最も発展している北京だけしか知らないで「中国通」を名乗れないと考えた私は、北はハルビン、南は雲南、西はウルムチと中国全土を巡った。その中でも雲南省での経験は中国を理解するうえで、非常に意義深いものであった。2017年3月1日から10日間、私は雲南省のプーアル市でフィールドワークを行った。二度目の雲南であった。7人の学生と3人の先生で雲南の農村に分け入った。フィールドで私が感じたのは、所得水準の低さが必ずしも生活の貧しさに直結しないという事実だ。私達がある農家をインタビューした時のことである。私達はおよそ2時間程度、その人の収入や職業などを伺った。その方の年収はおよそ2、3万元（1元＝16円程度）であった。インタビューが終わり、私達が去ろうとした時に、農家の方が一つ1500元もするプーアル茶をお土産として数個用意してくれた。なぜ年収の数分の一にもあたるものを初対面の私達にくれたのか。一つの要因としては、私達がその農家の方の親戚の紹介できたからだろう。「親戚の友達は客人」ということだ。しかし、それよりも大きな要因は、現金収入以上に農家の方は裕福だからであろう。この方は豚や鶏を飼っており、自家菜園も行っていた。つまり、ほとんど自給自足で、現金収入が必要なのは娯楽費くらいだそうだ。このような事実は北京で雲南省の統計データだけを見ていては絶対にわからないことである。現地でフィールドワークをすることでデータの上では農民のリアルを理解することができ、中国と言う国の多様性を再認識することができた。

　中国は広い。それゆえ、多様である。アメリカの大学院を目指す北京大生も雲南の農村でプーアル茶を作る農民も「中国人」である。そもそも北方人と南方人の遺伝的差異は日本人と韓国人よりも大きいそうだ。このような国の人を、「中国人」と十把一絡げに分類するのは無理な話ではないのか？目の前の人を「雲南人」「北京人」、そして一人の人間として接することが中国の多様性を理解する第一歩となるのではないのだろうか？

**【入　選】**

**加藤 亜衣**

**余計なものは要らない**

「おかえり」

初めて訪れた土地、大連空港で親友の李晴が大きな声で私に叫んでいた。私は、安心と喜びで上手く声が出なかった。

天候の影響により、フライトが遅れ上海で1日過ごした。26時間のフライトが遅れた到着に、李晴は安堵と心配した様子で迎えてくれた。この26時間は、私にとって「たからもの」になったことを李晴は、まだ知らない。

　人生で初めて1人で飛行機に乗り、李晴に会いに行く。飛行機の中では、李晴と過ごした思い出のエピソードをスパイスに、機内食を頬張った。周りの声は、中国語。勉強したばかりの、つたない中国語で隣の人に声をかけようか悩みながら、時間を確認した。本来、空港についているはずが、次のフライトまで、１時間を切っていた。今月は、旅行に向いていないという占いの記事が脳裏によぎり、不安を隠せなかった。けれども、「旅はこんなもんだ」と平然を装いながら、周りの様子を伺った。

　すると機内で何人か手を上げて、客室乗務員と話している。彼らも、フライト時間が遅れているようだ。私も勇気を出して手を上げ、客室乗務員と会話をした。しかし、中国語の勉強をして、間もない私は、何を言っているのか分からず、そのまま上海に到着してしまった。フライトが間に合わなかった仲間を見つけようと、同じ便の人に話しかけたが、大連行の便ではなかった。空港のロビーでもたらいまわしにされ、途方に暮れていた時、「どうしたの？」と救いの声が聞こえた。彼女は、同じ便に乗っていた中国人の方だった。

　彼女が、様々な手続きを空港中、駆け回ってくれた結果、次の日の便で大連に行くことが出来た。同じように、次の日の便で、行く人たちが何人か居た。彼らは、心配そうな顔をした私に「大丈夫、大丈夫」と優しい日本語で声をかけてくれた。夕食時には、みんなで和気あいあいと食事を頂いた。日本で働いていた人や新婚旅行をした夫婦、帰省中の人、みんなでたわいのない話を語り合った。あの時、食べた優しい卵スープの味は忘れられない。

しかし、最初に空港で助けてくれた彼女が、悲しい言葉を口にした。

　「中国の対応はすごく悪いでしょう。もう中国に遊びに来ないでほしい。私は恥ずかしいよ。」

あの時、すぐに「ちがう」と言うことが出来たならば、どんなに良かっただろうか。

けれども、帰国した今、彼女に伝えることが出来る。

「貴方たちのように、人情のある人を生んだ中国が大好きだ」と。

　初めて１人で搭乗したとき、期待と不安で胸がいっぱいだった私は、安心と優しさで心が満たされて帰国した。

私を“日本人”だと知ったタクシーの運転手さんは「ヨッシャー」と何度も元気な日本語で声援をしてくれた。レストランのお兄さんは、私のつたない中国語に耳を傾けてくれて、「ありがとう」と言ってくれた。夜行列車の二階の人は、美味しい饅頭をくれた。

　大好きな親友の李晴が生まれ育った国は、李晴と同じように優しくて温かかった。

　私が、“中国”へ行くと決めたとき、心配をする人がいた。

「危ないから気を付けて」と。

誰が“中国”を危ない国だと決めつけたのだろうか。

間違った情報が飛び交う世の中で、正しい情報を選別して、判断していくことが、現代社会で生きる私たちに必要であると強く感じた。そして、「百聞は一見にしかず」という言葉の意味を、身をもって体験した旅であった。

旅を終えて、一番に思ったことは、「中国へまた行きたい」。

「美味しい小籠包を頬張りたい」。

余計なものは要らない。これで十分なのだ。

「いってきます」

帰りの搭乗口で李晴に大きな声で叫んだ。

また会う日まで。再见。

**林 貢平**

**中国史を“旅”して**

私は子供の頃から歴史が好きでした。「歴史を学ぶには、まずは自国の歴史からがベターだ。」と思われる方が多いかもしれません。しかし、私の場合はそうではありませんでした。そう、わたしが初めて触れた歴史は中国の歴史であったのです。

小学三年生の時、私は一つの作品に出会いました。現代の日本人でも大多数の方々が一度は読んだことのある作品、「三国志」です。私が手にしたものは子供がわかりやすく読めるものでしたが、強い衝撃を受けたのをよく覚えています。三国志の英雄たちが繰り広げる物語はもちろんのこと、英雄たちが駆け巡った中国の大地、さらにこのような物語を生み出す中国という国はどのような国なのだろうか、というような興味を持つようになりました。

その時から、私の中国史の“旅”が始まりました。

中国史を旅するなかで私が最も好きになった人物は東漢を創始した光武帝・劉秀です。昆陽の戦いにおいて、百万の軍勢にわずかな手勢で切り込み、勝利を掴むという奇跡のような本当の話は光武帝の魅力であり、心に残っている逸話です。さらには万民が平和に暮らせるように大衆と同じ目線で政治を行うという、人の上にたつ者の手本になるような態度をとっていたことには感動しました。世界史の中で最も評価の高い君主の一人なのではないか、と私は考えます。そのような人物を輩出する中国のスケールの大きさには驚くばかりです。

旅の一環として、中国と我が国日本の歴史的関係を紐解くことも行いました。古代から中国は日本の手本でした。今この文章に綴られている漢字を見ればすぐにわかることだと思います。私たちの先祖は高度に爛熟した中国文明を学び、自分たちに合ったものにしていきました。この証は現在の私たちの生活圏にも見出せます。このようなものに実際に触れると、遥か昔から二国間は深い関係をもっていたのだなと感慨に浸ることがよくあります。

そんな両国の間にも悲しい歴史があります。特に日中15年戦争から現在に至るまでの歴史です。日中戦争時には我が国が中国に多大な損害を与えてしまいました。過去何千年の交流の歴史のある中で本当に残念なことであると思っています。そして私も大変申し訳なく思っています。しかし、今までの歴史を“旅する”ことはできても、“変える”ことは決してできません。現在、そして未来に向けて、両国が最良な関係を気付けるように今度は私たちが次の歴史を作っていかなければならないと強く感じました。1972年の日中国交正常化、1978年の日中平和友好条約で両国の関係に大きな進歩はみられましたが、現在の日中関係は良好といえるものではないことは明白です。遥か先祖の時代から深い関係をもっていた両国であるからこそ、このままではいけないということは多くの方々が認識されているでしょう。良好な関係を確固たるものとするにはお互いの理解が必要であると私は考えます。我々日本人は過去の事実を踏まえ、中国との関係構築のために何ができるか考え、実践していきます。どうか中国人の方々は我々の行動を見て、手を差し伸べていただきたいです。日本と中国が強い絆で結ばれる日を夢見ています。そして遠くない将来、私の新たな中国史の旅は、中国の大地で新たなスタートを切ります。

**明瀬 良治**

**一人の中国人留学生から広がるイメージ**

授業が終わり、私はいつも通り吹奏楽部の練習へ向かった。普段なら音楽室の扉の向こうから多様な楽器の音色が聞こえてくるはずだったが、その日は違った。いぶかしく思いながら私が着席すると、顧問の先生が突然、新入部員を紹介すると話し出した。その途端、私を含めた部員全員が一斉に驚いた。それもそのはず、顧問の先生の後ろから現れたのは、中国から来たとても大柄な留学生の男子生徒だったのだ。

彼の名前は宋仕喆。日本の力士のような立派な体格だけでなく、彼の日本人となんら変わりない流暢な日本語能力に私たちは驚かされた。部員たちの宋君への自己紹介が始まり私の番が来た。顧問の先生が私にすかさず言ったのは、「中国語でね」という一言。吹奏楽部で中国語を選択履修している生徒は私しかいなかった。その当時、私は中国語を学び始めて２年目にもなっていたが、とっさに中国語のフレーズが出てこず固まってしまった。結局その日は、彼の流暢な日本語の自己紹介に対し、私はしどろもどろの片言の中国語の単語を並べるだけで終わってしまった。

数日後、中国語を勉強している私に親近感を持ってくれたのか、宋君は私に「トランペットを吹いてみたい」と話しかけてきてくれた。私の担当もトランペットだったので、ここから彼との距離が一気に縮まった。彼の立派な体格から奏でられるトランペットの音色は力強く、技術はメキメキと上達していった。パート練習では、私がトランペットの技術を教える時間でもあったが、授業で習った中国語を本物の中国人に実践的に試してみる絶好の機会でもあった。本来なら宋君の流暢な日本語で意思の疎通はすべてまかなえたのだが、身に付けた単語をなんとか組み合わせて一生懸命伝えようをする気持ちを汲んでくれてか、私の支離滅裂な中国語に彼はいつも辛抱強く付き合ってくれた。彼は何度も何度も首をかしげるジェスチャーを繰り返しながら、私のつたない中国語を一生懸命聞き取ろうとしてくれた。そのような時、実際の年齢は私よりも下であった宋君が、なぜか自分よりも人生経験が豊富で、人間的にとても大きく感じたものだ。同時に、彼の生まれ育った中国という雄大な国が、とてつもなく偉大で魅力的に思えるようになっていった。

市内の保育所でのクリスマスコンサート、甲子園のアルプススタンドでの演奏、各コンクールへの参加を一緒に経験していくうちに、いつの間にか中国人留学生ではなく、一人の部員として、一人の親友として彼と接するようになっていった。海を隔てた遠い場所で生まれ育った彼と、今こうして同じ時、同じ高校生活を送っていることがとても不思議で、無意味に憎しみ合わなくて良いこの時代に生まれたことを大変ありがたく思えた。

一年間の留学生活を終え、彼が帰国する日がやってきた。「一年間本当にありがとう。宋君に会えて良かった。一緒にいろいろなことを体験できてよかった。宋君の優しさを僕は忘れないよ」こみあげてくる涙でうまく話せない私の途切れ途切れの言葉を、彼は一年前の出会ったあの日と同じように、「うん、うん」とうなずきながら辛抱強く聞いてくれた。

彼が帰国する直前、宋君は私だけにこっそりと手作りのお守りをくれた。彼の優しさが

詰まったそのお守りは、きっと私のこれからの健康や学業成就を祈願するだけでなく、私たちの国境を超えた友情が永遠に続くようにという祈りが込められているのだろう。彼の優しさが詰まったお守りを握りながら、私は彼の大きな愛に包まれたような気持ちになった。

私が出会った宋君という一人の中国人留学生から、私の中国人全体に対するイメージが大きく広がった。メディアを通じて、中国という国や中国人について見聞きすることはあるが、私は実際に自分が関わり交流し感じたことが真実だと信じている。私の出会った宋君は間違いなく日本や日本人が大好きで、偏見にとらわれない人間愛溢れるおおらかな人物であった。私はこのイメージを家族、友人、知り合いの人にどんどんと伝えていきたい。私を包んでくれた彼の優しさと愛が、私の関わる全ての人にどんどんと広がっていき、いつか地球全体を覆っていくことを願いながら。

**野村 由稀乃**

**１７歳の第一歩**

　この夏、私は大きな一歩を踏み出そうとしている。生まれて初めて、上海に、中国に行こうとしている。親は何も言わないけれど、あまり賛成していないことは雰囲気で痛いほどわかる。北朝鮮のミサイル発射に伴い、世界情勢も安定しているとは言えない。自分が高校三年生であることを私はよく理解していて、夏休みをどう過ごすかが進学に大きく影響することも分かっている。しかし、私はどうしても中国に行きたい。今、中国に行かなければならない。

　去年の夏、アメリカのカンザスシティを訪れた。ホームステイ先の家族は、アメリカ人のお父さん、中国人のお母さん、そして子供が二人いた。家には中国らしいものも沢山置いてあり、私が滞在した部屋の雰囲気もベッドカバーが漢字で中国風だった。私ははじめ、この環境に戸惑った。なぜなら、中国に対して良いイメージを持っていなかったからだ。中国人に嫌なことをされた体験はないのに、私は無意識に偏見を持っていた。しかし、ホストファミリーは私に優しかった。私が楽しめるように予定を組んでくれた。アメリカの食事に飽き始めていた私のために、カレーや豚カツまで作ってくれた。想像の中の中国人と彼らは、かけ離れていたのである。日本の大学に通っていたホストマザーは日本語を話せる人だった。つたない英語しか話せない私にとって、それは本当に救いであった。母国語ではないのに日本語も英語も流ちょうに話すことが出来る彼女は、たくましく勇敢でかっこいい。長い時間を彼女と過ごすことで、次第に彼女に強い憧れを抱くようになった。私も彼女の様な国際的な感覚を身に着けた人になりたい。まさか中国人の中に自分が憧れる人を見つけることが出来るとは、過去の私なら信じられなかっただろう。どれだけ極端な偏見を持ってしまっていたのかと自分でも恥ずかしくなる。

　アメリカに滞在中、車の中から電車を見つけた。その電車はもちろん線路の上を走っていたのだが、線路には塀やフェンスが取り付けられていなかった。後から母に、日本にもそのようなところがまだあると教えてもらったのだが、当時の私は驚いた。簡単に人が走行中の電車に飛び込めてしまうと考えたからである。ホストマザーにその考えを話すと、どうして日本人はそんなに自殺を考える人が多いのかと聞かれた。日本に住んでいたときからずっと疑問だったのだそうだ。確かに日本の自殺率は他国と比べると高いように感じる。ホストマザーの話によると、アメリカでは命は神様にいただいたものであるから、誰も、自分でさえも取ってはいけないという思想が強いそうだ。そして中国人は、辛い状況に陥ったとしてもそもそも自殺しようという考えを持たないのだ。この話を聞き、私は国民性の違いを今まで以上に感じた。そしてそれをもっと知りたいと思うようになった。

　日本に帰国し心に余裕が出来てから思う。私たち日本人は相手がどこの国で生まれ育ったか、ということを気にしすぎていると思う。それは日本が島国であることも関係しているかもしれない。日本人でも一人ひとり個性があるように、中国人にもそれぞれ個性がある。中国人として全ての人をひとくくりに嫌うことは問題だ。私はホストマザーと出会ったことで、価値観を大きく変えることが出来た。しかし、あくまでも私は彼女しか中国の方を知らない。彼女の印象だけで中国人を知った気にはなれない。もっと多くの中国の方と話してみたい。今年の夏、私の住んでいる県で上海の生徒と日本の生徒の交換事業がある。参加するために試験に合格しなくてはならないが、挑戦してみるつもりだ。他人の意見やメディアの報道ではなく、自分の目で、耳で、肌で中国を学びたい。そして、これからもっと大好きになるだろう中国について、周囲に自信を持って語れる日本人になりたい

**新斗米 創**

**武道の架け橋**

2009年3月18日、私は初めて情熱の大陸へ足を踏み入れた。飛行機の上で私はかつて無い興奮に包まれていた。地図上でしか外国というものを知らなかった私は機上から広大な大地が見えた瞬間、机上の世界を打破した快感を得た。上海虹橋空港を出て、パスに乗るとほどなくして窓越しからあふれんばかりの人、ビル、車そして漢字が目に飛び込んできた。人々は血気盛んな様子で街へ繰り出し、その上を所狭しとビルが空を覆い、それを威圧するかのような漢字だらけの広告。当時10歳の私にとって上海の町並みはあまりにも衝撃が大きすぎた。一歩バスから降りると上海の熱気で身体が溶けてしまいそうで身震いがした。バスは私の感情を置き去りにして目的地蘇州へと向かった。

私が中国を訪問した目的は蘇州で開催される中日武道交流大会に参加するためであった。 私は小学1年生の時から空手を習っている。私が小学四年生の時、師匠は私を含めた7名の門下生の大会出場を決意し、その日からより厳しい修行が始まった。私は団体の部で型を演武することになっていた。団体なので他の人と呼吸を合わせなければならないが、自分の目の前に敵がいると仮定して演武を進めるため他の人を無視して己の技に集中しなければならない。従って団体とは言え孤独なのである。師匠の檄が飛ぶ中、無我夢中で鍛錬した。時折師匠は自分と中国の関係を教えてくださった。かつて道場の近くに農業学校があり、そこに日中友好交流事業の一環として中国から多くの留学生が来日し農業を学んだ。その際道場にも多数の中国人留学生が訪れ、そこで師匠の下で武道を極めた。その中には中日武道交流大会の主催団体の一員として貢献している元留学生もいるという。私はその話を聞いて武道が人の心をつなぐのかと感動した。師匠の型は変幻自在で隙が無い。心•技•体が完全に一致している。その美しさは国籍関係なく見る者に感銘を与えるのだろう。私は師匠のように中国の人々が感動してもらえるような力強い型ができるよう一生懸命練習に励んだ。

そして迎えた本番当日。私たちを待ち受けていたのは華麗で、豪快で見る者を圧倒させる 中国武道だった。空を舞い、ヌンチャクに命を吹き込み、中国雑技団のような人間離れした技の数々。ついに出番が来た。飲み込まれそうになりながらも自分の立ち位置に立つ。見渡すと中国の観衆、選手が見える。視線が熱い。しかし精神統一。気付けば私は鷹になっていた。その型は最終盤大きな鷹のような動きをみせる。演武している間の記憶がほとんど無い。ただ最終盤中国の広大な地を駆けている感触があった。

終了後観客の皆さんの喝采の波で現実に戻った。舞台裏に引き返すと観客の皆さん、そして元留学生の方々が素晴らしかった、と讃えて下さった。結果は団体の部銀メダル。しかしそれ以上に中国の方々の暖かさが何よりも心にしみた。中国の方々に感動してもらえたか分からないが、遠い日本から来た少年達を家族のように歓迎してくれたのが嬉しかった。その後いくつかパーティーがあったがそこでも熱烈な歓迎を受けた。「热烈欢迎」の文字は今でも脳裏に焼き付いている。漢字は勿論歓迎ぶりに激しさを覚えたが、それは中国では普通なのだ。皆家族。人と人との関係に情熱を費やしてでも大切にする精神、そして鹰揚な態度に心打たれた。あれだけ圧倒されていた中国の町並みが飛行機の上では愛おしく感じられた。

日中間は長年政治の上で緊迫感を呈しており、テレビや新聞等で多く取り上げられている。しかしどうかメディアに左右されないでもらいたい。中国の人々は豪放な所もあるが根は非常に優しい。私は武道を通じてそれを認識したが、グローパルな時代であるからこそそれを認識できるチャンスはたくさんある。私は修練を積み重ね黒帯を頂いた。もう一度中国に「帰って」武道を通じて日中友好を強固にする、それが私の願いである。